

第六話 キリスト教の水観

鈴木重義

キリスト教の自然観

最初に『キリスト教の水観』という題を与えられたので、キリスト教の自然観から話したいと思います。キリスト教は自然をどのように考えているか。私は大学は農学部でして、それなりに自然に大変興味を持っておりました。教会には子供の時から行っていたのですが、聖書を読んでいて一番カチンときたことは、自然の中で人間が主人公面しすぎているのではないか、「生きとし生けるもの」、自然の哀れとか、そういうものが欠けているのではないか、ということでした。そこで何人かの高名な先生に、そのことを尋ねたことがありました。しかし、その時、私にとつてあまり適切な答えは帰ってきませんでした。それからずっとそのことが私の課題になつておりました。大学を出て学問の道に入り、農業土木学会誌の編集委員長を引き受けた時に、一度農業土木の自然観

を確立するような特集をやつてはどうかと大層なことを思い付いて、やったことがあるんです。その時に私は委員長の特権でそれまでに考えてきたキリスト教の自然観のようなものを書かせてもらいました。当時既に日本に環境問題が出はじめていました。聖書の自然観というのは、もともと天地万物、気象から生物に至るまで全てのものは創造主である神によつてつくられた、という考え方が基本的なものです。人間もその他全てのものも被造物、造られたものだというわけです。そこまでは他の神話にもある話なんです。そこから先がちょっと違ふのです。聖書では造られたものの中で人間は別の所にランクされているんです。神は人間を最後に造り、そして命じた。これらのものをお前が管理しろと。管理というと少しニュアンスが違ふので、「ナース」つまり「大事に診とる」と言つた方が良いかもしれませんが、そのように命ぜられたと創世記に書かれています。キリスト教の自然観はそのような見地

に立つて培われていったのだらうと思います。つまり人間は自然の管理者であるということですね。実はこれが私にはカチンときたことだったんです。人間は、自然の中の一つではないか。その方がずっと謙虚で良いという感じですね。だから西洋思想は嫌なんだという気持ちもありました。自然の管理とか征服とかの思想に直ぐ繋がるんじゃないかと思ひましてね。ただ環境問題がしだいに出てくるにつれて、「待てよ」という感じが私の心の中に起こってきたんです。それはどういうことかと言うと、生けとし生けるものと言っている日本で環境が本当に大事にされているのだろうか。かえって環境問題を問いはじめたのはキリスト教国からなんです。非常に激しく出て来ているんです。これはもしかしたら私達は生けとし生けるものという無責任な同列に自分を置くことで、したいことだけして逃げてしまっているのではないかと。本当にナースする役割を担わされているのなら、環境が悪くなることは人間の責任ですから、その方が環境問題として位置付けがはつきりするのではないかと。そのような気がしてきましたんです。そういうことに気付いて、少し書きました。すると反響がありまして、何人かの方々から手紙をもらいました。キリスト教の自然観は、人間が神から自然を委ねられて、そのあるがままの姿を保つ責任を人間が負わされているという立場です。聖書にもこのように書かれています。

ユダヤ教の世界

キリスト教を語る前に先ずその原型であるユダヤ教を語らねばなりません。キリスト教の全ては聖書に書かれています。聖書には旧約聖書と新約聖書とがあります。最近では旧約と新約の間、三百年位の空白を埋める外典というものも聖書の中に入れて来ています。キリスト以前までの著作物が旧約聖書以後が新約聖書と分けることが出来ます。旧約の世界は、宗教的に言いますと、ユダヤ教の世界です。ユダヤ教とキリスト教の関係ですが、ユダヤ教が最初にあり、キリスト教はイエスが生まれてからユダヤ教を超越した形でグローバルな宗教に成長したものです。一方、ユダヤ人は現在に至るまでユダヤ教を守ってきています。このようにキリスト教は、旧約聖書を共有しているという意味ではユダヤ教を受け継いでいるわけです。しかし、新約聖書の世界はユダヤ教と同じではありません。

そもそもユダヤ教は、民族宗教です。布教ということをしません。末倒の奥地までユダヤ教の宣教師達が布教に出て行くということはないのです。ユダヤ人は、長い間世界各地に散らされているので、民族のフィジカルな独自性も完全に保たれているわけはありません。けれどもユダヤ人は断固として存在しています。ユダヤ人は自分達の宗教としてユダヤ教

を持つていたのであって、決してそれを他民族との共有の宗教とは考えていないのです。自分達のアイデンティティはその中にある。逆にいうと各地に散らされているユダヤ人達は、ユダヤ人であることを守るためにユダヤ教を守り、ゲットーを作るというところで、一部で摩擦も起こっている。ユダヤ教というのはそのような宗教です。

キリスト教はユダヤ教の社会から生まれて来たユダヤ人の一人であるイエスによって新しく始まった宗教ですが、くつきりとした違いがあります。それはキリスト教はグローバルな宗教だということです。人類普遍を目指しているわけで、従つて布教もします。ではどういう所が違ふのか。幾つもの例をあげることが出来ますが、一つの例をあげてみたいと思います。キリスト教では洗礼という大切な儀式があります。洗礼とは、ひとことと言えば教会員になるために頭に水をかけてもらうか水に入るかすることです。水に関連した儀式によつて教会の会員になることですね。このほか会員になつた者が教会でパンと葡萄酒を食べる聖餐という儀式もあります。一方、ユダヤ教には昔から汚れは外から来て身につくものだから水で洗つて身を清めるといふ発想がありました。発掘される神殿や宮殿にもミクバーと呼ばれる儀式用の浴槽が出てきます。また、キリストの誕生した時代には川のはとりに行つて、罪を悔い改め水に入る、そのような洗礼教団が幾つか成

立していました。聖書に出て来るバプテスマのヨハネはそのような教団の教祖です。聖餐についても、ユダヤ教に原型が見られます。ユダヤ教は、モーセが奴隸状態にあつたユダヤ民族を引き連れてエジプトを脱出して来る、いわゆる出エジプトが出发点にもなっています。労働者として有能なユダヤ人達は、奴隸状態から容易に解放してもらえなかつた。モーセが民族を引き連れて出て行きたいといつても、エジプト王からは拒否される。その時にユダヤ教の神は幾つかの奇跡をそこで行います。そのうちのひとつは、神がモーセに密かに告げて、今夜夜中に神の手が全てのエジプトの長男を打つて皆殺しにするけれども、ユダヤの人達は門口に小羊を殺してその血を塗つておけば、その家は神の手が通り過ぎるといふことを教えます。

ユダヤ人達はそれに従い、無事脱出を勝ち取りました。そのことを覚えて、それから後ユダヤ人達は、過越パスクの祭りといふのを守るようになりました。その家を慌ただしく出て行くとき、パンにパン種（イースト菌）を入れて発酵させている暇などありませんから、パン種の入っていないパンを急いでこしらえて、むしゃむしゃ食べて飛び出して来るわけです。その時の食事を過越の食事と言います。それは今でもユダヤ教徒の大切な儀式、神の恵みの記念として毎年ユダヤ人達によつて守られています。

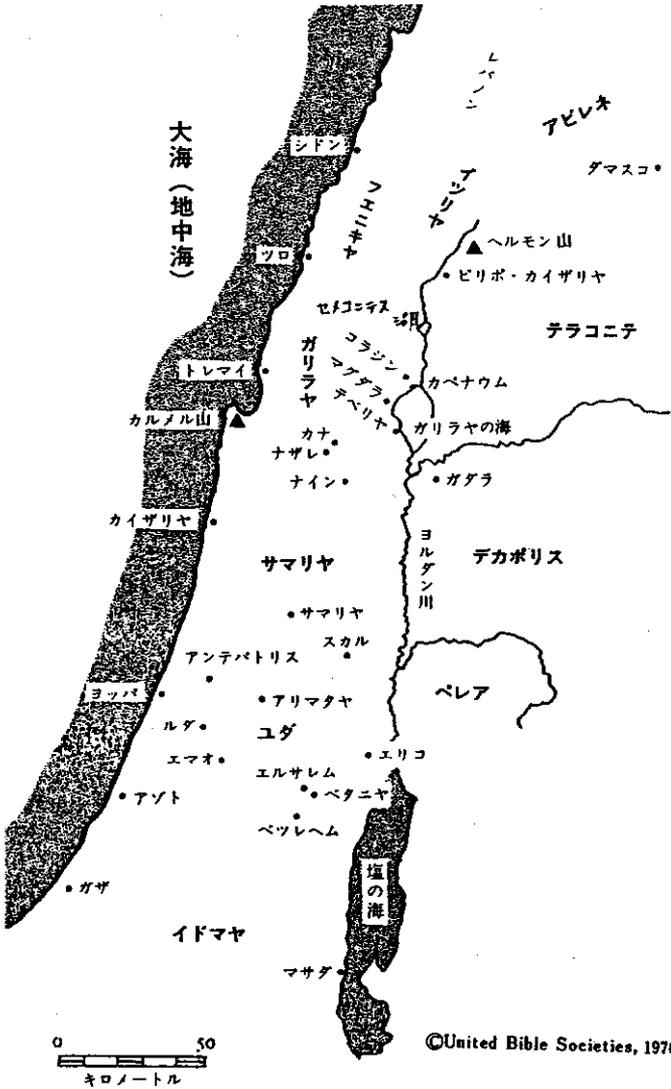
一方、キリスト教の聖餐は、イエスの十字架は人々の罪を代わりにあがなうためだということで、キリストの恵みを記念して行われますが、そのパンはキリストの体であり、葡萄酒はキリストの血であるとされています。超越の食事と重なり合いますが意味付けは大分違うわけです。洗いの儀式についてもユダヤ教では外側から身を清めると考えますが、キリスト教の洗礼は同じことをやりながら意味が違います。水に入るとは死を意味します。そしてそこから出てきて、神の力（聖霊の働らきと呼んでいます）によって新しい人間に生まれ変わるといふ、「新生」を意味しています。キリスト教はユダヤ教を全て下敷きにしていながら、このように意味付けはまったく違うものになっている。この意味でキリスト教はユダヤ教から生まれたが、まったく別の宗教であるとい切つても良いと思います。

パレスチナの気候風土

図一はパレスチナの概略の地図です。高低関係が分かりませんが、イスラエルの等高線の入った地図が手に入りません。戦略的に重要だからでしょうか？この地図を見ますと、周囲にエジプト、ギリシャ、ローマ、バビロニア、ペルシャ、とにかくかつての歴史で世界を制覇するような強い国々があった。そして、東洋と西洋の通り道に位置している。この

パレスチナという地にユダヤ人が住むようになったのは紀元前千五百年位からです。ここに住むようになって以来、独立して自分達の国を楽しんだ時期はほんの僅かありません。強い国の狭間になって、常に戦場になっていた。どちらかの国が何時も占領していた。交通的には良い場所ですが、物資は何もない。地勢的には一方が地中海、北からはペルシャやギリシャ、そして南にはエジプト。一番大きい特徴は一本の川、それがヨルダン川、南に死海、北にはガリラヤ湖。ガリラヤ湖の水面はマイナス二百十二メートル。死海はマイナス三百九十二メートル。両側は山地で、エルサレムという首都はプラス八百二十一メートルですからエルサレムから真つ直ぐ死海の方に降りてきますと、およそ千メートルを越える落差を降ることになる。つまり間を流れているヨルダン川は、千メートルの割れ目を流れている川なんです。これは有名なヨルダン地峡と呼ばれ、ここで大陸が分かれていたと言われています。このような地形がパレスチナの特徴です。そしてヨルダン川の右と左で全く風物も民族も違います。それからもう一つ大麥山が多い。緑のある山地は少なく、牧草地が砂漠が大部分で、豊かな所ではありません。ほかにたいした川はなく、上流にセメコンテスとガリラヤという小さい二つの湖があり、それらと死海をヨルダン川が繋いでいます。また、この水を直接汲み上げるとは不可能です。なにしろ標高差

図一 新約聖書時代のパレスチナ



が千メートルからありますので、役に立たない。ヤムルクとヤボクは小さい支川です。ヨルダン川の流量は上流のガラリヤ湖でポンプで先取りされることもあって、今ではせいぜい四十トン／秒程度です。日本の河川と比べても小さいですね。海岸側には雨が降った時だけしか流れのない川が幾つかあります。ワジと呼ばれます。以上が全体の地形です。

気候は複雑で、概略は雨が一番多いのは冬です。十二月、一月が一番多くて、それから二月、三月が次に多い。五月から十月は乾季で、雨は全く降らないという気候です。乾季と雨季に分かれています。また、基本的には雨は北の方の地帯に多くて、南の方が少ない。南の方は年間百ミリメートルに足らず、五十ミリメートル位の所もあります。北の方は八百ミリメートル、真ん中のエルサレム辺りで六百程度、ヨーロッパ並みですね。海岸線地帯は二千ミリメートル近く降る所もあります。しかし、少し内陸に入ると降らなくなり、地峡帯になると全然ないんです。大変複雑な気候ですね。勿論、それに伴って気温も複雑で、一日の内に夏と冬が来るといわれています。特に酷い時には日中の温度格差が二十度以上になります。気温はエルサレムでは夏（八月）は二十五度前後、冬（一月）は八度位。砂漠があって上昇気流がある。それで午前中暖まると午後になると地中海からかなり強い湿った風が吹き込んで来ます。そんな所が主な気候の状態です。世界

の気候を五区分した場合、第四ランクに属する気候ですから、かなり悪い気候ですね。ただ面白いことに、午後に湿った風が入ると、夕方露がおります。聖書には露の恵みを語っている記述がかなりあります。聖書のある場所では、水が足りない時に羊の毛に付いた露をしばって、それを飲んだという記述もあります。草の葉の表面にも露は付きます。それから今でもやっているのですが、露塚と言いまして樹木の周りに拳大の石を隙間を開けて積み重ねておきますと、風が吹き抜ける時に塚の内部が冷たいので露が結ばれて、水滴が出来ます。この水滴で結構オレンジの木一本位育ちます。さて地理的な概略はこの程度にして本題に入って行きたいと思えます。

ユダヤ教の水観

一番最初に言いましたようにユダヤ教とキリスト教は似ていて違うという所があります。どこまでがユダヤ教の水に関する考え方で、どこからがキリスト教のそれなのか大変難しいのですが、ともかくユダヤ教の水観から入って行きましょう。ユダヤ民族の歴史の転換点というのは、二つの大きな旅から始まっています。一つの旅はアブラハムの旅です。彼はユダヤの一番の先祖と言われており、バビロニアのウル、チグリス・ユーフラテスの河口に近い所ですが、の種族の族長

です。当時は多神教の世界なんです、ある時唯一神の啓示を得て、その神に導かれて一族を連れて延々と旅をしてパレスチナにやって来ました。大変雄大な旅です。一族や家畜をいっぱい引き連れましてね。この旅がパレスチナにユダヤ民族が現れる最初の旅です。牧畜民であるユダヤ民族が今のパレスチナ・カナンに来た時には、既に農耕民族である先住民が定着しており、それなりの文化も栄えていました。ユダヤ民族は干ばつなどのためその地に定着出来ず、流れ流れて紀元前千三百年頃までにエジプトに定着します。そのことは強大な権力の下で奴隷状態で生きること以外ありません。アレクサンドリアの三角洲の辺りで長い年月ユダヤ人はこのような境遇で過ごすわけです。それがある時、神のお告げを受けて、モーセという指導者が立ち上がり、ユダヤ民族を引き連れて脱出する。これが第二の旅です。大変な数の人間を引き連れ四十年もの放浪を続けるわけでまさに劇的な旅で出エジプト（エキソダス）という名前で知られています。大脱出ですね。第二次大戦後、この地にユダヤ人が定着するときのポール・ニューマン主演の映画が出ましたが、その題名も『エキソダス』でした。モーセは岩だけで雨が全く降らないシナイ半島の地域を、定着する場所を求めて放浪し、死海のほとりのエルサレムと反対側のネボ山の山頂で生涯を終えます。モーセはかたに緑の沃野を望みながら死ぬわけで、これが

二つ目の筋目です。その時からユダヤ人達はここに定着を始めます。旧約聖書にはその時の苦難の旅のエピソードが幾つも書かれています。例えば、水が全く無くなって立ち往生したときにモーセが祈って杖をついた。するとそこから水が噴き出したというような奇跡物語があります。水には困り果てています。モーセが最後に行き着いた場所から死海の向こうを見ると緑が見えた。モーセはそれを見て、「蜜と乳の流れる約束の地」と表現しています。それ程の場所ではないのですが、荒野を放浪してきたモーセにとつては夢のような土地だったのでしょう。モーセに導かれたユダヤ民族はこの土地は神から与えられた土地だと考えます。先住民からすれば迷惑な話ですが、ともかく彼等はそのように信じ、続々とカナンの地に侵入を始めます。ユダヤ人達の定着の始まりです。聖書にはその時のことがいろいろの表現で出てきます。例えば神から賜った良い地カナンの表現として、「谷にも山にも湧き出る水の流れ」というのがあります。水があるということが良い土地の象徴になるわけです。そのような表現は他にも沢山出てきます。ずつと後になって、ユダヤ民族が征服されて苦難の道を進む時のことを書いた旧約聖書の『エレミア書』というのがあります。エレミアというのは予言者と呼ばれる宗教指導者の名前です。その中でユダヤ民族があまりに苦しいので自分達の神を捨てて他神に走ろうとする。その時にエ

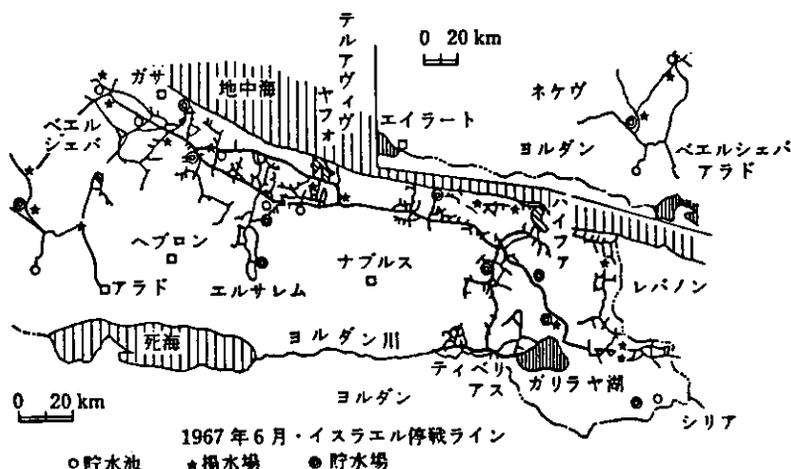
レミアが警告を発します。その言葉に「生ける水源である神を捨てて」というのがあります。神を表す象徴として「生ける水源」という言葉を使っている。ユダヤ民族にとって水は神の恵みのしるしとして受け取られたことは疑いありません。それならこのような神の恵みとしての水を当時ユダヤの人々はどうのようにして使っていたのか。それに少し触れてみたいと思います。

水の使い方

先ず彼等はどこから水を得ていたか。

それには現在何をやっているかを考えるのが暗示的です。と言いますのはイエスの時代のパレスチナと現代のそれとは気候的にも地形的にもほとんど変わっていないからです。だから現代からアブローチしても面白いのではないかと考えられます。イスラエルは、建国以来膨大な資金を注ぎ込んで水の開発をやっていますが、開発するといっても水はこしらえるわけには行きませんので、あるものを使えるようにするというのが水の開発ですから、開発の結果を見れば水がどこにあるのが良く分かるわけです。現在のイスラエルで安定使用出来る水資源がどのような割合になっているか。これはイエス当時の潜在的な水資源の状態を類推するのに面白いのではないかと思います。現在、イスラエルの統計上の水資源は、

河川水が七・六億トン／年、これには洪水の水も含まれます。洪水も溜めて使われます。キリスト誕生の頃は、すでにダムから都市に導水することが行われていました。洪水が起こるのは、地中海に向うワジのある地域です。この辺りは土壌が水に締まり易く、洪水はあつという間に海に流れ去ります。そこでその水を溜めるのですね。水の利用の主なものは農業灌漑です。図一二は現在のイスラエルの水路網図ですが、最大の水資源はガリラヤ湖です。これは標高がマイナスですからポンプで揚げなければなりません。ガリラヤ湖の水を全国ネットで送るわけです。水路は部分的には開渠ですが、大部分は暗渠です。これは軍隊に監視されているまさに生命の大動脈です。ガリラヤ湖の一部は他国に接しているため問題は複雑です。かつて中東戦争の時、イスラエルがゴラン高原を占領したことがあります。そのきっかけになったのは水でした。高原はシリアに属しており、シリア政府は支流の河川をカットして水をガリラヤ湖とは別の場所へ導こうとし、實際運河を掘り始めたのです。これをやられるとイスラエルには大打撃です。それで水源確保のため、そこを占領してしまいました。しかし、イスラエルが独占的にガリラヤ湖の水をポンプでどんどん汲み揚げて使うので、周囲の国には不満があります。ガリラヤ湖の水利用はイスラエルが断固として握っているわけで、ヨルダン川の水は使っていません。二番目の



図一 水路網（「イスラエルという国」イスラエル大使館編より）

大きい水源は、地下水で、六・五億トン。意外と大きいですね。地質は石灰岩ですから、一度地面の割目から地下にしみこむと、地下の川になって流れます。次に使われた水源は湧泉だったでしょう。これは開発が楽です。現在の利用水量一・六億トン。聖書の中の水源の主流は湧泉だったと思います。現在あつて昔は全くなかった水、それは下水処理水です。これが一・三億トン。海岸沿いに下水処理場がありまして、徹底的に再利用しています。以上合計十八億トン／年。もちろん降雨も百パーセント利用です。日本の水利用率は十パーセント程度と言われていますが、イスラエルはほとんど百パーセントです。この狭い土地に人口がどんどん増えているので、これだけの努力が必要なのです。昔の利用可能な水はほとんど湧泉で、その次が地下水だっただろうということが想像つきます。聖書にも使用頻度として湧泉、地下水の順序で記述が出てきます。

さてそれでは当時水はどのように使われていたのか。先ず雨を徹底的に利用する。イスラエルの当時の普通の家は、石で壁を作り、屋根は多少傾斜をつけ、木を渡してその上に葉っぱ等を敷き、漆喰で固めた。こうすれば水がしみこみません。こうして水を集め、各戸毎に小さい水槽を作って貯めました。また自然の洞窟が沢山ありますので、それを掘り広げ、せき止めて、地下の池を沢山作っております。図一三はキリスト

時代のエルサレムを再現したのですが、この図の中に聖書に出てくる有名な池が沢山あります。市街の周りから得られる水を全部市中に引き込んでいます。場所によっては高い水槽を作ったり、トンネルを掘ったりして市内の地下深く階段を掘って行ってそこで溜めるわけです。このような地下貯水槽が沢山ありました。どの位あったかと言うと、例えばエルサレムの神殿というのがありますが、その神殿の周りから三十六の地下貯水池が発掘されました。大体一つの平均が千六百トン。一番深いものが二十メートル位。縦横十メートル、深さ十六メートル。全部でおよそ六万トンです。神殿の周りの池だけでこれだけなんです。当時一人一日六十リットル使ったとすると、一万人の百日分になります。かなりの水量と言わねばなりません。その他にも本格的な導水路があります。例えば旧約聖書に出てくるヒゼキヤという王様（紀元前六〇〇年頃）は大変土木好きで、ギボンの泉からトンネルを掘り、一時間五十トンの水を地下貯水池シロアムの池に導いた。常時これだけ流れたと仮定しますと、二万人分ということになります。大変な水量です。ともかくこのような池がエルサレムの市街にいっぱいありました。トンネルの長さが五百メートル以上、勾配は一万分の二十四という精妙なものです。ごく正確に造られています。以上はエルサレムの水利施設ですが、個々の家はどのようになっていたかと言うと、金持

ちの家は方形で真ん中が庭になっており、その中庭に必ず噴水や池があって、そこに導水し、そこで水浴したり洗いのをしたり飲み水を得たりしています。貧しい人達は共同の貯水池、たいてい街はずれにあるのですが、に女の人が飲み水を汲みに行った。池の給水時間が決まっていて、知らせがあると女達が水の容器を持ってぞろぞろと城門を出て水を汲みに行った。このような情景が聖書にも出てきます。掘り抜き井戸ではなくて、水が溜まる井戸に汲みに行ったり、地下の池に降りて汲み揚げたりしていたのです。農業にも結構使われていました。灌漑用のダムも幾つか発見されています。ワジのある地域ですが、かなり緻密に果樹園や野菜畑を作っていたらしい。だからユダヤ人は定着してからはそんなに酷い状態でなく生活していたようです。大飢饉で逃げたという記録はありません。以上が当時の水利用の実態です。このような実態からいよいよキリスト教の水観に入っていきます。

キリスト教と水

こういう時代にキリスト教が生まれました。既にローマやギリシャの影響も受けています。アレクサンダーはイエスより三百年前ですから、ギリシャの土木技術も入って来ていました。ローマの水の技術の高さは御存じの通りです。したがって既に各街々に水浴場がありました。昔のユダヤ教のリー

ター達、ラビ（教師）と言いますが、は水浴場の無い町に住むなど言っているほどです。共同の水浴場等もイエスの頃には出来ていました。この水は炊事に使われるのはもちろんですが、煮炊きと言ってもパンを焼いて食べるのが主です。だから煮炊きにも水はそんなに必要なではなかった。一番沢山使われたと思われのは洗うということです。洗うということの中には体を洗うのと衣服を洗うのがあります。特に体を洗うことは聖書にたくさん出てきます。聖書は二千年間研究し尽くされているので、洗うという言葉がどの場所に幾つ出ているかがすぐに分かるようになっていきます。洗う、清めるという言葉はもう嫌になるほど出ています。宗教儀礼と生活の規範、この両面から洗う、清めるということ盛んにやっていた。

ユダヤ教徒が今でも厳しく守っている戒律の一つは、食事の時に必ず手を洗うことです。特に右手を洗う。これはアラブの社会でも同じですが、手を洗わない食事は有り得ない。これについては聖書に論争が出てきます。マタイ福音書十五章二十節ですが、キリストとその弟子達が食事をしているのを眺めていた戒律に厳しいユダヤ教徒が、イエスのところに行き文句を行った。

「あなたも宗教指導者なら弟子が食事の前に手を洗うという戒律を破っているのをどのように考えているのか。」

これに対してイエスは、革命的な言葉で答えたんです。「手を洗うということは外面的なことである。外面は心を汚さない。大切なのは心だ。」

今であれば言えますが、当時は死刑に値する言葉なんです。二千年にも亘って定着してきた考えを一言で覆すのですから。「口から出て来るものは心から出てくるので、これこそ人を汚す。口に入るものは腹を通して外に出されることが分らないのか。」

こう言って従来の宗教的な戒律の形式主義に反対しているのです。これはキリスト教とユダヤ教の違いを如実に表しています。このような考え方があって初めてキリスト教はグローバルなものになり得たのだと思います。また前にも述べたように、イエス以前にも洗礼教団というのがありました。自分の罪、汚れを清めるためにヨルダン川に下りて行って川で身を清めた。イエス自身も洗礼を受けたんです。けれども後にそれを超克してゆきます。水が清めるのではなく、水は死を表わす。キリスト教は清めの概念を水から血の方に移動させて行きます。人の罪はどうして清められるのか。それは人間の力ではどうにもならない。人間の罪を背負ってキリストが十字架にかかって血を流した。その十字架を信じることによって、つまり代理の死によって人間が清められた。このような考え方です。実はこの発想はユダヤ教にもあります。

過越祭の時の小羊の血がそれです。この犠牲という考えは、ユダヤ教に原形がないわけではないが、外面的なものから内面的なものに乗り越えるためにキリストの十字架が必要だった。ここに至れば似て非なるものと言えます。

結論ですが、ユダヤ教は水は神から与えられた恵みであり、清めのシンボルであると考えます。ところがキリスト教では別の意味を与えられ、本当の清めは血であるというように意味が変わるわけです。キリスト教がこのようにユダヤ教の水観を変更したと説明出来ると思います。

討論

中西 地下に水を溜めて使っていたわけですから、汚さないように気を付けたと思うのですが、汚染防止はどのようにやっていたのでしょうか。

鈴木 エルサレムのイエス時代の下水道を私は、見たことがないので、多分下水道はあっただろうと思います。同時代のカイサリアからは、立派な下水道システムが発掘されていますから。とにかく汲む所と使う所が、離れているんです。だから使ったことで水源が汚れることはまずなかったと思います。また、岩の上の町ですから、しみ込んで地下水を汚すこともなかったと思います。エルサレムの周りは砂漠ですから、流せば恐らく砂漠に行ったのではないかと思えますね。

中西 いま再利用が多いのですが、用途は何でしょうか。
鈴木 一番多いのは灌漑です。イスラエルは考えられないほど灌漑が発達しています。灌漑率は非常に高くて全耕地面積の八十三・六パーセント。世界中から資金が来るので投資は幾らでも出来るのでしょうかね。灌漑面積は、大麥な伸びようです。一九七一年十七・一万ヘクタール、以下七十六年十八・七、八一年二十・三、八六年二十七・五。ぐんぐん伸びていますね。断っておきますが、水田はありません。畑です。そのほとんどが灌漑されているわけで、食料の自給率も日本とは比較になりません。小麥だけでも一人当たり七〇キログラム。この数値は、日本の米に相当するものです。こんなに条件の悪い所でこれだけの収穫を小麥だけでも挙げているのですから、大変なものです。ヘブライ大学の重要な使命のひとつは灌漑の研究、教育です。砂漠の灌漑技術に関する世界一の研究所を持っています。

須藤 キリスト教と水観の関係を考えるための参考書、宗教別の水観の比較のための参考書にはどのようなものがあるのでしょうか。

鈴木 水観という思想的なものを考えるためには聖書を読むしかないでしょう。キリスト教の原典は聖書だけです。ただ水観を形成した基礎になるものは何かというと無数に文献があります。いろいろな宗教で水観がどのように違うのか、

比較水観の研究はしたことがありません。思想形成には歴史だけでなく、地理的条件等の自然条件やその他いろいろな条件が影響するでしょう。例えばアラブの場合等は地理的条件の影響が多分に強いですね。イスラエルはアラブとは違うのです。イエスの時代はもう農耕民族でしたから。牧畜民族とは全然違うのです。確かに今でも綿羊などは沢山飼っています。基本的には定着農民です。「砂による清め」は出て来ません。清めは水だけ、ただ石鹼のようなものは使っていたようで、灰汁で洗うとか、泡の出るものを輸入して使っていたようです。聖書にはそうした記述が幾つか出てきます。

須藤 地下水の塩分の問題、塩害が気になるのですが、この点はどうなんでしょうか。

鈴木 地下水も結構塩分が高いと思います。主水源のガリラヤ湖で海水の三分の一位の塩分濃度があります。だから灌漑は農地を塩害で駄目にしないためとても慎重にやっています。例えばドリップ方式、常時根の部分だけにポタンポタンと水分を与える、しかも土中の水分量は常時少し過剰になる位にして塩分の集積を押さえます。あるいは地下にパイプを入れて地下灌漑をする。これは地表に塩分を上げないためです。いろいろな方法がありますが、イスラエルの灌漑の主流はドリップ法です。

照井 水が乏しいわりに、不自由なく使っていたようですが、

どのように使っていたのでしょうか。それからユダヤ教の清めは日本の若水を汲むというような習俗に、キリスト教の洗礼は仏教の「死に水をとる」ということに似ていると思っても良いのでしょうか。

鈴木 洗礼を受けた人の中には、これで清めの要素も含めて考えた人もいるでしょうね。しかし、キリスト教の洗礼は、再生のための手順です。仏教の送りとは違うし、若水ともちよつと違うように思います。

それから乏しい水がどのように使われていたかということですが、一人当たりどのように使っていたかという記録は知りません。先程原単位が六十リットル程度と言いましたが、それほど無かったと思います。手を洗うのも洗面器で洗ったのではなく、小さいボールで洗うわけですから。今でもユダヤ教の過越祭の時には同じ方法で洗っています。宗教的なものを使う水の量は僅かなものです。それに金持は沢山いるわけではないので、多少の浪費があっても問題にならないでしょう。だから先程試算したように結構人口が養えるわけです。当時の人口はわかりませんが、第二次世界大戦直後のユダヤ人はパレスチナに六十万人しかいなかった。だから昔もそんなに大勢はいなかったでしょう。昔は泉のある所にその泉で養える程度の都市が発展したんでしょうね。それにしよつちゅう侵略されて、死んだりいなくなったり、何万人

という人がバビロンやその他に連れて行かれて、都市が空っぽになったこともしばしばだった。従って人口もあまり増えていないのではないかと思えます。このように泉レベルでずっと推移してきたのですが、実は最近になって問題が大きくなりました。現在の人口は四百三十六万人。大戦後七倍以上になりました。泉では限界がありますので、ガリラヤ湖等の水の使用を増やす以外ないわけです。その結果、死海への流入水量が激減、死海はどんどん狭くなってきた。大変な環境変化が起こってきて、問題になっています。そこで現在イスラエルの考えていることは海水の淡水化です。

尾崎 イエスの当時、遊牧民族であつたユダヤの人々は、先住民の人達と麦などを交換していたのでしようか。それから地下水の塩分ですが、これはどういふことでしょうか。

鈴木 イエスの当時既に麦をユダヤ人自身が沢山作っていました。もともとユダヤ人は先住民のいたカナンの地に侵入し、彼等を駆逐したわけで、全く新しい土地を開拓したのではなく、こうして農耕民族に転換したのです。現在は葡萄やオレンジをヨーロッパに独占的に供給しています。農業生産品は日本と違ってとてもバランスが取れています。これは多分周囲の国から孤立しているからではないかと思えます。地下水は地下の割れ目に溜まった水です。いわゆる砂漠を通ってきて地下水表面が形成されるといふものではない。塩分が問

題になるのはガリラヤ湖の表流水の使用です。

中村 イスラエルは宗教はユダヤ教なんでしようか。それからユダヤ教からキリスト教へ、またその逆に簡単に改宗出来るのでしようか。そうした文学者がいたので。

鈴木 そう考えて良いでしょう。もちろんキリスト教徒もいますが、大部分はユダヤ教徒です。それから改宗は本人の問題です。ゲットーに居てそうすることは出来ないでしょうが、違った社会環境なら自由でしょう。ただ、ユダヤ教徒でなければユダヤ人ではないと言われています。ユダヤ人であることはユダヤ教徒であるということなんです。

中村 サルトルの「ユダヤ人」には国によって全然ユダヤ人が違ふのだとありましたか。

鈴木 共通なのは最底過越祭をきちんとやつていふこととです。それを守らないとユダヤ人ではない。

中村 農業生産ですが、それだけ徹底した灌漑、再生利用をするといふことはコストとの関連で見合ふのですか。

鈴木 商業としての農業であれば見合わないかも知れませんが私達は医者にかかる時、コストを考えないでしよう。政治的に孤立した国で、自給出来ないかと死あるのみですから。水は血の一滴と言われています。商品として農業を考えないのです。この点では日本の考えの方が間違つていふのではないでしようか。徹底的に土地にこだわっています。シオンに掃

ろうというのは彼等の合い言葉だったんです。二千年来の流浪の民で、シオンに帰ろうと言い続けて来たんですね。シオニスト運動とはそうしたもので、モーセの時から宿願ですね。それから国によってユダヤ人が違うというのは、戒律の守り方が違うということだと思います。この点はイスラム教も同じですね。

谷口 ユダヤ教からキリスト教への改宗には有名なジョークがあります。イエス以前は皆ユダヤ教徒、だから神様もユダヤ教の神様。熱心なユダヤ教徒が息子がキリスト教に変わるというので、神様に「困りました。どうしましょう。」とお祈りしたら神様曰く、「心配するな。わしの息子もそつだ。」(笑い)。これは有名なジョークなんです。

粟田 モーゼが杖を突いたら水が出たという話は弘法大師のようで、興味を引かれました。昔の灌溉用水の構造はどのようなものだったのでしょうか。日本は素掘が多かったようですが。それから右手を洗うという理由ですね。最後に、洗礼は再生だと言われましたが、それは神に近付くことなのか、それとも別の意味があるのか。以上三点を教えて下さい。

鈴木 昔の水路は大い素掘でした。イスラエルは岩砂漠が多くて、結構吸い込まれなかつたんですね。エジプトのように人力で水を掻き揚げるようなことは必要なかつた。割りに傾斜地が多いので、流れるわけです。二千年以上前の農業を

再現し、将来の農業に生かそうとしている研究所があります。その写真等を見ても割に雑な水路ですね。

それから右手のことですが、聖書にはそのように書かれた部分が一箇所ありますが、それだけで別に右手にこだわった痕跡はありません。左手を不浄というようなことは聖書には書いてない。宗教上はこだわっていないと思います。たんなる儀礼、習慣なのは。

洗礼ですが、洗礼を受ければ罪は犯さなくなるというわけではない。宗教用語で言う「恵みの先取り」と言うのです。それが完全なものになるのは天国に行く時だ、という思想が基本的にあります。だから先取りだということです。こうして救いが約束されると自由な発想で行動出来るようになる。だから解放という言葉がよく使われます。罪意識からの解放ですね。ここから先の領域はどうも牧師さんの領域のようです。稲場 キリスト教の自然観ですが、人間が管理者になるという思想ですね。聖書は、「管理者としてどのように自然を管理すべきだ」と言っているのでしょうか。

鈴木 パウロの「ローマの信徒への手紙」の中に「自然が救いを待って呻いている」という記述があります。結局自然があるべき姿になっていないということですね。人間と自然は共に神から作られたものであり、人間が正しく管理することで自然が自然のあるべき姿を取り戻し、はじめて人間と共に

救われる、こういう思想です。このような考え方は大変ユニークな考え方ではないかと思えます。私はこれを読むと人間の責任は大へんなものだなと感ずるわけです。

稲場 先生は環境問題は、キリスト教国から鋭く提起されたと言われました。一方で聖書の教えがあります。私は、結果と教えが逆になったと思うのです。それは何故なんでしょうか。聖書の教えの通りやっておれば環境問題は起こらなかつたはずだと思えますから。

鈴木 だから人間の罪が問われているのです。その通りやれる人間ならキリストの十字架による宗教は生まれなかつた。建て前があるのにぜんぜんそのように動いていない所に人間の問題はあるわけです。宗教はそのためにあるわけです。だから教えに鋭く反応するものも持っているわけです。日本は同じことをやりながら、鋭く反応しているのか。しているとしたら何を根拠にしているのか。私にはそれが見当たらないのです。

谷口 仏教とキリスト教の違いには自然観の相違があるという説があります。パレスチナのような所は自然が人間を擁護してくれるような存在ではない。大変自然が厳しくて、人間に過酷である。自然は人間に敵対するような存在であつた。従つて人間は自然に頼るのではなく、神の恩恵に頼らざるをえなかつた。ところが東洋は自然が穏健であつた。過酷なこ

とがあつてもじつと待てばやがて恵みを与えてくれた。このように自然の違いがキリスト教と仏教の教えの違いになつてゐる。この説はかなり説得力があるように思ひます。また、イスラエルには血で血を洗う激しい歴史があります。ところが仏教では血を残酷なものとして嫌う傾向がある。そこで日本人はキリスト教を嫌うような気がします。血を見据えることを避ける。

鈴木 血を嫌うのはイスラエルでも全く同じです。キリストが死ぬ前に自分の死を予告して、自分の血と身体を受け入れる人間でなければ天国に行けないと言つと、大ぜいの弟子が去つて行つた。本当にイエスのもたら去つてしまつたのです。イエスは驚いて、後に残つたペテロ等数名の弟子に「お前達も行くのか」と尋ねた。そして「行かない」と聞いてホッとする場面があります。どこでも血を嫌うのは同じなんです。血を厭うのは旧約聖書でも厳しいものがあつて、厳重に守れば輸血も出来ない。ユダヤ教でも血による汚れを強く言つてゐます。イエスの語つたことは革命的で当時のユダヤの人々にも受け入れられないものだったので。

それから風土の違いの論理は説得力がないわけでもない。ただ、イエスの当時のイスラエルの風土をただ荒地とか荒涼とした砂漠とかという風に規定し過ぎてゐる面があります。イエスの時代には農耕民族になつてゐました。歩きながら麦

の穂を摘んで食べたり、葡萄園に入ったりしていたんです。荒涼とした所ばかりでは決してありません。また台風や洪水というものもありません。アブラハムは洪水伝説の起こった地方の只中で生活していたので、外部から別の思想が持ち込まれたということは当然あります。しかし、どこまで日常的に自然は恐ろしいと言っているかという点、聖書で自然の脅威を語った部分は殆どないんです。実際の文言としてですね。逆に自然を賛美している所はある。私は、これは読み込み過ぎだと思っています。アラブの地域なら分かりますが。